

高知県物部川流域山田堰井筋土地改良区“なでしこ”の活動 The Operation of Nadeshiko in Yamadazeki-Isuzi Land Improvement District

東山郁子*, 植野寛*, 有馬弘一**, 佐藤泰一郎***
Ikuko HIGASHIYAMA, Hiioishi UENO, Kouichi ARIMA and Taiichiro SATO

1 はじめに

土地改良区は、耕作者によって構成される法人であり、事業の主体となり、整備施設の維持管理を行う団体である。これにより、農業生産基盤の整備と用排水が維持され、生産活動が行われている。

近年、社会情勢の変化により食糧が輸入中心になり、農家および農地の減少が進んでいる。また、これまで整備された施設の劣化・老朽化による更新が求められている。さらに、都市化進行に伴い水環境、水辺の生物環境の改善、整備が求められている。このような中で、土地改良区は新たな問題や要求に対応する必要がある。そこで、土地改良区内に女性部を組織し、活動をはじめたので報告する。

2 山田堰井筋土地改良区の現状

山田堰井筋土地改良区は、物部川に設置された頭首工(合同堰)、幹線用排水路および施設を管理運営する組織である。これらの施設により、香長平野、高知平野の2000haに農業用水を供給している。

山田堰は、1663年に竣工し、上井、中井、舟入の井筋を通じて灌漑を行うことに始まる。その後、洪水や水不足を繰り返しながら、補修・改修、調停により、高知県農業の主産地となった。現在の山田堰井筋土地改良区は、総事業費31億円で長さ114mの全面可動型の堰と幹線用排水路延長35kmの水路と付帯施設を維持管理し、1800haの受益面積を持つ。

本土地改良区では、基本計画当時は米の増産時代で2期作が盛んに行われていたが、米の生産過剰により、整備や合理化がもたらされ事業が進められてきた。そして1973年に、組合員4800人、賦課面積1850haの組織として発足した。また、灌漑用水として8.61m³/sの許可水利権を得た。

発足当時は、維持の定期的な塗装関係の保守費用の支出が主であった。1987年の出水により油圧関係が損傷し、このころから電気関係の保守費用が増え、最近では、堰本体にも損傷が発見され、補修費が支出された。このように、補修費用の累計は、1億2千万円となり、建設費用の30%となった(図1)。

土地改良区運営の基礎となる賦課金は、発足時に

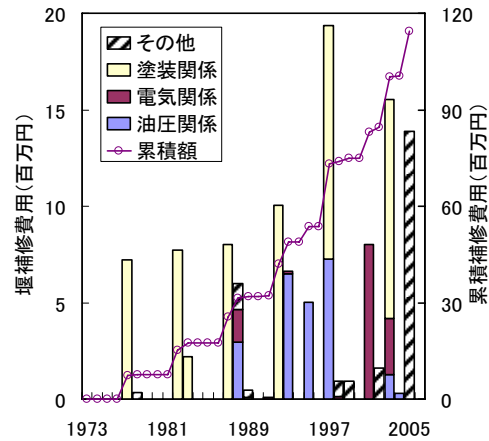


図1 物部川合同堰補修費用の推移

Fig. 1 Trend of repair cost in the Godo-Zeki

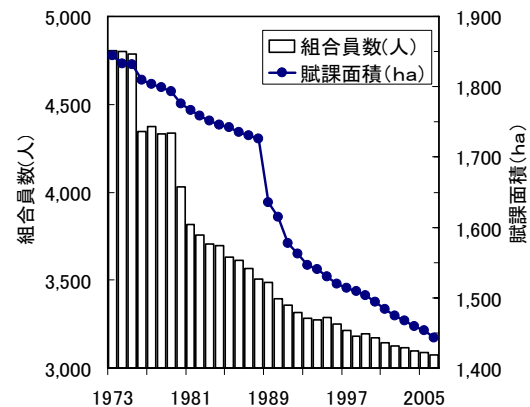


図2 山田堰井筋土地改良区組合員と賦課面積の推移

Fig. 2 Trend of association member and impose area in Yamadazeki-Isuzi Land Improvement District

は1600円/10aで、事業量の増加に伴い3000円/10a間で増加したが、1988年より2700円/10aを限度とした。しかし、米価が下落し続ける中で、賦課金は据え置かれ、組合員の負担になっている。そのため、施設園芸や畑作を主とした営農への転換や離農が進んでいる。

*山田堰井筋土地改良区 Yamadazeki-Isuzi Land Improvement District, **高知県農業振興センターCentral east of the Kochi prefectural Agriculture Development Center, ***高知大学 Kochi University, キーワード: 集落計画, 土地改良区, 農村振興, 女性部, 地域貢献

現在、組合員は土地改良区発足当時より37%、賦課面積は22%減少し、近年はこの減少に歯止めがかからない状態である(図2)。

農地が減少した結果、都市化が進行し、下水道施設が十分でない地域では、家庭の排水やゴミが用水路に混入し、水環境が悪化し、農業生産にも影響がある。また、農地の減少は、水利権の更新にも影響し、取水量の制限を受け、水路末端農地の水不足が深刻化している。さらに、施設園芸で利用される地下水の量と質の確保が懸念される。このように、土地改良区の運営には、施設の維持管理に加え、都市化される地域との対応が求められる。

3 なでしこの活動(山田堰井筋土地改良区事業推進のための新たな取り組み)

都市化進行は、これまで培われてきた土地改良区の役割にも変化をもたらすようになってきている。山田堰井筋土地改良区は、取水者として水源の涵養に寄与するために、2002年に物部町別役に森林2.75haを取得し管理をしている。また、これまで水源を整備管理してきた物部町に“感謝米”を2002年から2005年まで贈呈した。そして、2003年より“舟入川ウォーキング”を開催し、用水路や土地改良区の歴史、役割や水辺の生き物の説明、地元食材による昼食を提供し、交流と理解を深めている。

舟入川ウォーキングの特徴は、ウォーキング参加者とボランティア参加者がほぼ同数であることにある。参加者は、第1回のみ94名であったが、その後160名を越え、2007年には182名となり、総数が350名を超えた。参加者の60%以上が始めてであり、用水路、土地改良区を知る効果がある。また、物部川流域外からの参加者が年々増え、昨年は35%となり農業生産物の宣伝が期待される。また、連続して参加者も増える傾向にあり、地域への貢献が期待される(図3)。ウォーキングでは、毎回アンケートを実施し、反省と改善策を検討している。アンケート結果からは、土地改良区や水路の役割への理解が深められている。しかし、参加者は水環境の悪化への懸念、農産物の食材としての不安を指摘している。

そこで、地域貢献を通じて、農村、農業の活性化に寄与するために、土地改良区内に“女性部:なでしこ”を組織した。“なでしこ”は、土地改良区組合員家族(女性)を中心とした。女性は、子育てを通じ学校教育や自治会、サークル活動など非農家を含めた地域社会とのつながりを持ち、これまでの土地改良区の考え方と異なる視点を持っている(図4)。

“なでしこ”の役割は、これまでの土地改良区組織

にとらわれず、行事への貢献や新たな提案を求めることにした。2007年の舟入川ウォーキングでは“なでしこ”が中心になり、地元食材を使用した昼食のメニューづくりから調理を行った。2008年は、用水路の川干のときに実施された地元小学校の校外学習“生き物調査”において、水路の役割や歴史について講師として説明した。また、水源涵養林を非農家との交流の場とするための植林を含めた整備を行った。舟入川ウォーキングでは、昨年実施できなかった参加者やボランティアと交流し、農業への理解を求め、消費者の動向調査を行う。そして、水路へのゴミの投げ入れを少なくするために、水辺環境整備のための取り組みを行う予定である。このように、なでしこは、地域社会と直接かかわりを持つことにより、土地改良区事業の推進に寄与できると考えられる。

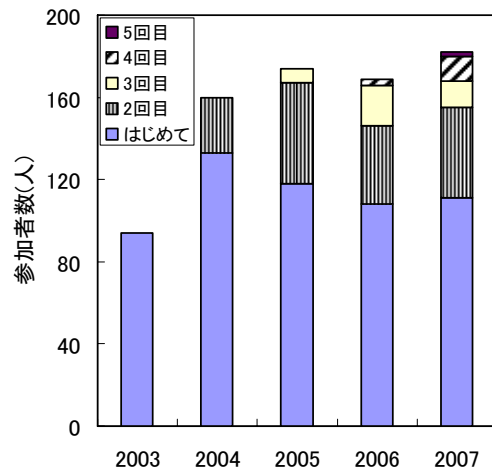


図3 舟入川ウォーキング参加者の推移

Fig. 3 Trend of the participant in the Funairegawa walking

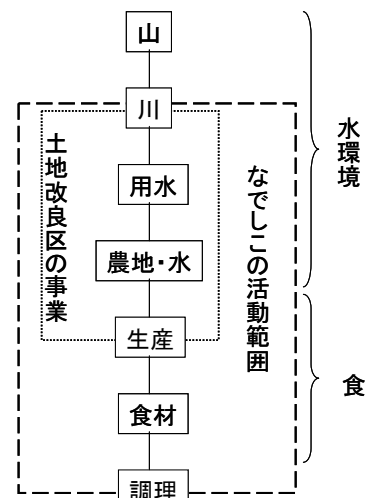


図4 なでしこの活動概念

The conception diagram the operation of Nadeshiko